



大久保 洋平

略歴

- 1999年 東京大学大学院医学系研究科
医科学専攻修士課程入学（一期生）
- 2005年 同博士課程修了（医学博士）
- 2006年 同助手／助教
- 2011年 同講師
- 2020年 順天堂大学大学院医学研究科准教授

東京大学医科学修士の第一期生となって

卒業研究発表会も無事終わり安堵感に包まれていた1999年3月、ぼんやりと掲示板を眺めていたところ「医科学修士」という文字が目飛び込んできました。東大医科学修士の第一期は、このように3月に告知、すぐさま試験、そして4月から授業開始というタイトなスケジュールで始まりました。偶然かつ幸運にもこのポスターを目にした私は、次の瞬間には受験を決意していました。

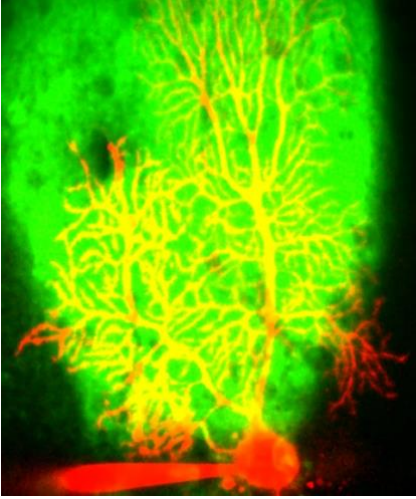
当時の私は東京大学の学部時代に所属していた研究室にそのまま進学することが決まっていますが、学部時代とは違うアプローチで神経科学研究をしたいと常々考えていました。当時から多くの神経科学系研究室を擁していた医学系研究科へ、博士課程から進学することも視野に入れていた私にとって、医科学修士新設はまさに渡りに船でした。「非 M.D. が医学部でまともな研究ができるのか？」といった周囲の意見もあり、もちろん私自身不安はありましたが、結局それらは杞憂でした。

無事入学試験に合格し集まった一期生は、進学先が決まっているのに敢えて進路変更して来ただけのことはある「濃い」面々でした。バックグラウンドは多様でしたが、基礎医学・生命科学への情熱は非常に高いものがありました。先達のいない一期生として、手探りで情報収集と判断をする必要がありましたが、その分結束は強いものとなりました。卒後20年を迎えた現在でも交流は続いており、アカデミアに限らず多様な進路で活躍中の同期に今も刺激を受けています。

研究室の選択については、講義およびローテーション期間に熟慮することができました（当時は全ての学生が研究室を決めない形で入学していました）。この半年間のモラトリアムは、自分の研究志向を相対化し客観視した貴重な期間であったと思います。その中で、「活きた分子を顕微鏡で直接観る」というイメージング研究に漠然とした興味を抱き、細胞分子薬理学教室（飯野正光教授：当時）の門を叩きました。実際に配属されてまず衝撃を受けたのが、一介の学生に野心的なテーマとそれに見合うリソースを与え、自主性に任せて研究させるということでした。ただ決して指導が不足することはなく、これをもって飯野教授は放任主義ならぬ「放牧主義」と仰っていました。

神経細胞におけるシグナル分子の可視化実験を通じて、「実際に見てみるまで何が出てくるか分からない」、セレンディピティを要するイメージング研究の醍醐味に触れ、カスタムメイドの二光子顕微鏡（当時はまだ製品として発売されていなかった）などを弄りながら刺激的な大学院生活を送ることができました。そしてその中で、当初は漠然としていた自分の研究志向が明確になっていきました。すなわち「観られなかったものを観られるようにする」技術開発によりシナプスにおける分子動態を定量し、脳の機能と病態をボトムアップ的に理解するというアプローチです。医科学修士での経験が血肉となり、20年間に渡りこのような研究が続けられていると確信しています。

図



図の説明

小脳皮質に固定したグルタミン酸可視化プローブ EOS（緑）とプルキンエ細胞（赤）